

詩人たちの絵

詩人たちの絵

窪島誠一郎

平凡社

著者略歴

1941年、東京生まれ。

「信濃デッサン館」館主。

キッド・アイラック画廊・小劇場主宰。

著書『父への手紙』（筑摩書房）

『信濃デッサン館日記』（平凡社）

現住所 長野県上田市東前山前山寺

「信濃デッサン館」内

2208

詩人たちの絵

1985年1月11日初版第1刷発行 定価 2,200円

著 者 窪島誠一郎

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区三番町5 丁目102

電話03 (265) 0451 (代表)

03 (265) 0455 (営業)

振替 東京 8-29639

企画・編集 株式会社平凡社教育産業センター

印刷所 本文 東洋印刷株式会社

カラー 株式会社東京印書館

製本所 株式会社石津製本所

製函所 永井紙器印刷株式会社

© Seichiro Kuboshima 1985 Printed in Japan

不良本は平凡社読者サービス係までお送りください（送料小社負担）

ISBN4-582-82803-5

詩人たちの絵

目次

立原道造／パステルはやわらかし

5

追分路のうた

下町に生まれて

詩の妖精たちと

宮沢賢治／修羅の渚から

41

暗く重い風土

イーハトヴの光

雨ニモマケズ

富永太郎／橋の上の自画像

73

詩と絵のあいだ

人妻H・Sとの恋

パイプのある絵

黒表紙の画帖

小熊秀雄／君もしゃべり捲くれ

運河のほとりで

池袋モンパルナス

千早町三十番地

村山槐多／愛と渴望のうた

洛北より信濃路へ

ガランスのごとく

鐘下山房で

おわりに

図版目録・かいせつ

琴丁 佐藤 忠

パステルはやわらかし

立原道造

1914～1939

追分路のうた

立原道造——この甘ずっぱくやるせない、どこか秘密めいたひびきをもった詩人の名が、はじめて私の心に入ってきたのはいつごろだったろう。たぶん中学二、三年ごろ、友だちから借りてよんだ角川版の『立原道造全集』（昭和二十五年刊、全三巻）が最初だったのではないかと思う。ぶ厚い四六判くらいの、薄ねずみ色の布表紙の本だった記憶がある。私はそこにおさめられている『暁と夕の詩』とか『萱草に寄す』とか『優しき歌』とかいった甘美で抒情的なソネット形式の詩集にすっかりまいてしまい、何日もうつろにすごしたものだ。とくに「のちのおもひに」と題した詩のふしぎな韻律にみちた出だしは、私をながいあいだ不眠にさせた。また、「はじめてのものに」の冒頭は、中学生の私に何ともいえないひそやかな興奮をもたらしした。

夢はいつもかへって行つた 山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり 火山は眠つてゐた

——そして私は

見て来たものを 島々を 波を 岬を 日光月光を
だれもきいてゐないと知りながら 語りつづけた……

(のちのおもひに)

ささやかな地異は そのかたみに

灰を降らした この村に ひとしきり

灰はかなしい追憶のやうに 音立てて

樹木の梢に 家々の屋根に 降りしきつた

その夜 月は明かつたが 私はひとと

窓に凭れて語りあつた(この窓からは山の姿が見えた)

部屋の隅々に 峡谷のやうに 光と

よくひびく笑ひ声が溢れてゐた

(はじめてのものに)

いずれも、道造が好んで旅をした(兄事する堀辰雄が滞在していた)信州、信濃追分で作られた詩で、静寂と涼気につつまれた避暑地の田園風景と、火山(浅間山)爆発の鳴動にたくした詩人の微妙な憂鬱(ゆううつ)がうたわれている。平穏と凶事とのあいだにゆれる青年のふくざつな恋心、感傷がうたわれているといったらいいだろうか。おだやかに眠る火山と灰のふりかかる村の情景が、一枚の織り布(ぬい)のように眼にうかぶ。それはまるで、貧しく不完全だった私の青春——受験システムの授業にあげくれ、いつも成績はビリケツで劣等感になやみ、何ひとつ明日に希望などもてなかった自分の日常に、何ごとか静かに語りかけてくるような詩に思えた。うちひしがれた自分を、何だかうっとりするような上品で高級な精神世界へつれていってくれる詩だった。私は、自分のしらない過去に、こんなふうに自分の心の深部にやさしくささやきかけてくる詩を聞いた詩人がいたことに胸をとぎめかせた。

ゆふすげびと

かなしみではなかつた日のながれる雲の下に
僕はあなたの口にする言葉をおぼえた

それはひとつの花の名であつた

それは黄いろの淡いあはれ花だつた

僕はなんにも知つてはゐなかつた

なにかを知りたく うつとりしてゐた

そしてときどき思ふのだが 一体なにを

だれを待つてゐるのだらうかと

昨日の風に鳴つてゐた 林を透いた青空に

かうばしい さびしい光のまんなかに

あの叢くさむらに 咲いてゐた……さうしてけふもその花は

思ひなしか 悔いのやうに――

しかし僕は老いすぎた 若い身空で

あなたを悔いなく去らせたほどに！

詩集『萱草に寄す』に入っている「ゆふすげびと」という詩だが、これも私の道造熱をたかまらせた作品の一つである。のちの解説で、これが追分で出会った北麗子（あるいは横田ケイ子）という女性にささげる恋歌であることをしたが、「ゆふすげびと」は道造の心に咲いた「黄いろの淡いあはれ花」につけられた名であるにちがいないと思つた。道造は、いつもだれかを待ちわびている詩をかいた。そしてその待ちびとは、いつも道造に待ちぼうけをくわせて姿をあらわさなかった。「ゆふすげびと」は、そうした詩人のまぶたにうかぶ未知の待ちびと、会いたくても会えぬ永遠の待ちびとに冠せられた美しくはかない花の名である。ここにも、道造の詩とくゆうの、心にしみこむような孤独感と音楽的なしらべがあつて私は魅入られた。

パステルは

やはらかし。

うれしかり、
ほのかなる
手ざりは。
うれしかり、
パステルの
色あひは。

(昭和四年「文集ノート」より)

立原道造の絵をみたのは、それからずっとあとになってからだ。月日がながれ、私は高校をでてからいくつかの職業を転々としたのち、水商売で金をため画廊主となり、やがて信州・上田市郊外に小さな私設美術館をたてたが、そんなとき、道造の実弟達夫氏のもとに永年保存されていた道造の中学時代にかいたというパステル画やデッサン、油絵が、ようやく陽の目をみることになり、一冊の画集として刊行されるというニュースが新聞にのった。私は、その画集『立原道造詩画』（昭和五十四年、綜合工房刊）の刊行記念として東京丸善でひらかれた「立原道造パステル画展」で、はじめて詩人道造の絵をみたのである。

その絵は、少しも道造の詩を真切っていなかったといつてよい。というより、私が抱いていた二

十何年も前の詩人立原道造に対する初恋のような思いを、少しも傷つけることなく眼前によりみがえらせたといつてよい。それほど道造の絵は、すがすがしく初々しい色彩と線描をもって私の心にとびこんできた。それはさながら、道造の詩の分身であり、道造の詩以上に詩的であるといつてよかった。こんな絵を、道造は年譜にあるように「主に中学時代に集中的にかいた」のであろうかとびつくりした。

たとえば、いかにも道造らしいあたたかくやわらかい色づかいとタッチでえがかれたバステル画「魚の絵」(仮題)は、例の道造の手製詩集『散歩詩集』冒頭の「魚の話」を思いおこさせる童話的なイメージにあふれていた。

天使は見た、魚が、倒れて水の面の方へゆる／＼と、のぼりはじめるのを。彼はあわてた。早速神様に自分の過ちをお詫びした。すると神様はその魚を星に変へて下さつたのである。魚は海のなかに一すぢの光をひいた、そのおかげでしなやかな海藻やいつも眠つてゐる岩が、見えた。他の大勢の魚たちはその先について後を追はうとしたのである。やがてその魚の星は空に入り空の遙かへ沈んで行つた。

そういうメルヘンが、パステル独特のまろやかな色感とたくみな造形、構成力によって描き出されている。一見パウル・クレーの「魚の魔術」や「魚の群れ」を連想させられる絵だが、ここには道造だけがもつ幼い詩心の純化があるといっているだろうか。少年道造は、まるでパステルに自分の言葉、物語をしゃべらせようとしているかのようなのである。

また、道造が生まれそだった東京下町——日本橋橋町界わいをえがいた「街上比興」「町の風景」(仮題)「区画整理風景」(同)といった絵には、道造的ともいえる温順でひめやかな光がふりそいでいて美しい。それは詩「ゆふすげびと」にも「のちのおもひに」にも共通するどこか物憂げな、さびしげな光でもある。工事現場で働く人々、電信柱、商店、物干し台、ペンキ看板、自転車、紙芝居、そういった何気ない下町の風物が、道造得意のななしみ色にそめられているといったらいいだろうか。

とびぬけてステキなのは、オカッパ頭の恋人をえがいた「鮎子の像」(仮題)である。

この絵には、道造が『優しき歌』や『暁と夕の詩』にしるした恋愛歌のエスキス(原型)というべきものがある。利発そうなひろい額、眉、鼻すじ、少ししずんでみえる黒い瞳、唇に、道造のモデルへの思慕の深さがひめられている(これは一説によると鮎子ではなく金田久子であるという意見もある)。詩人は、一通の恋文をかくような思いでこの絵をかいたのにちがいない。少女への愛が、憧憬が、内省的で静謐にみちた美しい画面のなかにぬりこめられている。そして、背景の空間にほどこされた紫とも藍ともつかない微妙な色あいの重なりからは、何か「色彩の音階」とでもよんでいいよう

な蠱惑^{こわく}的なリズムがきこえてくるのである。私はこの「鮎子の像」をみると、『萱草に寄す』にある「みまかれる美しきひとに」という詩を思いだす。

みまかれる美しきひとに

まなかひに幾たびか 立ちもとほつたかげは
うつし世に まぼろしとなつて 忘れられた
見知らぬ土地に 林檎の花のにはふ頃
見おぼえない とほい晴夜の星空の下で

その空に夏と春の交代が慌しくはなかつたか
—— 嘗てあなたのほほゑみは 僕のためにはなかつた
—— あなたの声は 僕のためにはひびかなかつた
あなたのしづかな病と死は 夢のうちの歌のやうだ

こよひ湧くこの悲哀に灯をいれて